

## 狩野探幽筆「草花写生図巻」

加藤 弘子（日本学術振興会特別研究員(PD)）

狩野探幽(1602-1674)の写生とは、一体、何だったのか。かつて、発表者は『國華』誌上においてこの問いを発し、探幽の人物と鳥獣の写生について考察した。本発表では、植物の写生として狩野探幽筆「草花写生図巻」(東京国立博物館蔵)をとりあげ、写生図と本画の関係を再考する。

「草花写生図巻」は、探幽が寛文年間を中心に描いた写生図を、ほぼ季節別に5巻に編纂したもので、膨大な古画を写した「探幽縮図」と同様、探幽が明暦の大火で失われた粉本の素材として作成したものと考えられている。また、探幽の写生図と本画にはモチーフの一致が殆ど見いだせないため、探幽の写生は本画に活かされなかったと指摘される一方、なぜ花鳥画に描かれないような植物や目立たない雑草まで写したのかとの疑問や、探幽の植物写生はあくまでも楽しみや勉強のためのものであるとの見解も提示されてきた。

そこで、「草花写生図巻」の目録を作成した上で、各図の描写、とくに「生臙脂」などの有機染料による淡彩表現に注目して写生の特質を探った。次に、①図巻の装丁、②裏端書(旧外題)、③月の留め書きの検討から編纂の目的と時期、編纂者を探り、さらに、本画の範囲をかつて存在していたと伝えられる探幽・常信による花鳥画卷「百花鳥」まで拡張、描かれた植物の種類について「草花写生図巻」と照合した。

その結果、探幽の植物写生の最大の特徴は、鋭く対象を把握する、軽やかで洗練された色彩感覚と彩色技法にあること、無精巻の装丁や「天和二年七月」などの裏端書(旧外題)、李迪筆「紅白芙蓉図」の縮図にある開花期と異なる「十二月」の留め書きからみて、探幽没後に粉本に編纂された可能性が高いことが判明した。また、興味深いことに、狩野探幽原画「百花百鳥(写)」(国立国会図書館蔵)、石中子編 狩野探幽原画『画図百花鳥』、川越藩の舩津蘭山が写した探幽齋筆「百花鳥(写)」(蘭山記念美術館蔵)には、南アメリカ原産の玉蜀黍に雁、地中海原産の鷹爪に山雀、日本に自生する目立たない植物である虎杖に蒿雀、といった新しい花鳥の組み合わせが確認できる。探幽と常信が活動した時代は、『本草綱目』の受容を背景に、新たに認識された内外の動植物を写生帖に取り込み、やがて新しい花鳥の組み合わせを構想する必要性に迫られてゆく段階にあったと考えられる。

今後は、写生図のモチーフを本画に探し求めるだけでなく、写生図にみられる線描や色彩といった造形において最も基本的で本質的な描写の特質が、いかに本画に表れているのかを丁寧に検証していく必要があるだろう。探幽の本画の特徴については、江戸時代から「筆墨飄逸 伝彩簡易」(狩野永納『本朝画史』)と評されてきた。「草花写生図巻」にみられる鋭く軽やかで洗練された色彩感覚と彩色技法こそが、現在も「軽妙」「瀟洒」「端麗」と形容される探幽の本画を全面的に支えているのではないだろうか。